

### テレビが記録した「震災」「原発」の3年： メタデータ分析を中心に

NISHIDA, Yoshiyuki / 西田, 善行

---

(出版者 / Publisher)

法政大学サステナビリティ研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Research on Sustainability : The Academic Journal of the Research Center  
for Sustainability / サステナビリティ研究

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

125

(終了ページ / End Page)

143

(発行年 / Year)

2015-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012125>

## テレビが記録した「震災」「原発」の3年 —メタデータ分析を中心に

Three years of television records of the earthquake and nuclear power plant accident; Centered on metadata analysis

西田善行  
Yoshiyuki Nishida

### Abstract

---

Soon four years will have passed since the Great East Japan Earthquake. Over this period, television has produced various news reports, documentaries, and other programming depicting the course of development of the earthquake and nuclear power plant accident. But few studies have analyzed these programs over a long time span. In light of this situation, this paper considers how television has recorded the earthquake and nuclear power plant accident over the three and one-half years since the disaster struck, particularly over the roughly three-year period from August 1, 2011, half a year after the earthquake, through August 31, 2014.

First, we analyzed metadata on these programs to examine what television reported on in communicating information on the earthquake and nuclear power plant accident over these three years and to analyze changes in regions reported on and in the content of such reporting. We analyzed what kinds of changes occurred when restricting the sample by region. Then, focusing on programs that reported on the city of Minamisoma, which saw enormous loss of life due to the tsunami and even now feels the effects of the nuclear power plant accident, we used metadata and actual images to examine how the story was covered over this three-year period.

*Keywords:* Memories and Records, Metadata, Minamisoma, the Great East Japan Earthquake, The Fukushima Dai-ichi nuclear power plant accident

### 要 旨

---

東日本大震災から4年が経過する。テレビはこの間様々な震災、原発事故に関わるニュースやドキュメンタリーなどを制作し、その経過を映し出してきた。しかしこれらの番組を、長期的なスパンで分析を行った研究は少ない。本稿ではこうした現状を踏まえ、震災後の3年半、とりわけ震災後およそ半年が経過した2011年8月1日から2014年8月31日までのおよそ3年間、テレビがどのように「震災」「原発」を記録してきたのかを考えていく。

まず番組に関する「メタデータ」の分析から、この3年間テレビが「震災」や「原発」を伝えるなかで「何を」

報じたのか、その内容と地域の変化を分析する。さらに地域を限定した上でその地域にどのような変化があったのか、分析を行った。そこで津波の犠牲を受けたうえで、原発の影響を今でも受けている「南相馬」を取り上げた番組にクローズアップし、この3年間何がどのように映し出されたのか、メタデータと具体的映像から考察を行った。

キーワード：記憶と記録 メタデータ 南相馬 東日本大震災 福島第一原発事故

## 1. 震災後4年一減少する報道と蓄積される放送番組

2011年の東日本大震災と福島第一原発の原発事故から4年となる。震災当時、連日トップニュースとして扱われ続けていた震災や原発に関する報道も、その量を徐々に減らしつつある。こうしたなか、テレビや新聞で震災や原発に関する報道のなかに、その「風化」を危惧するものも増えている<sup>1)</sup>。このような状況は2011年からの時の流れを実感させるものといえる。

その一方で、日々放送されている震災、原発事故関連の特集番組やドキュメンタリーは、この4年間で多くの蓄積がなされてきた(原・山田・野口編, 2014)。こうした番組の視聴は、多くの視聴者にとって放送された一回限りのものに留まることだろう。しかし、なかにはこの未曾有の体験を描いたドキュメンタリーや特別番組を記録に残そうと、その番組を録画し、DVDやハードディスクなどの保存媒体へと蓄積している視聴者もいるだろう。そうでなくともYouTubeなどの動画共有サイトでは震災当初の放送の様子をはじめ、様々な震災や原発に関連する放送が散発的にアップロードされている。さらにはNHKオンデマンドなどのように放送局側が過去の震災関連番組をネット上に流す場合もある。

また震災や原発事故に関する放送を録画し、保存媒体へと蓄積してきた研究者や研究機関も少なくない<sup>2)</sup>。保存媒体の大容量化により、小規模な放送アーカイブであれば容易に設置可能な状況のなかで今回の震災・原発事故は発生した。

このようにたとえ断片的でも様々な形で放送された震災や原発事故の映像を「見直す」ことが可能なメディア環境が近年形成されている。一般投稿動画も含め、これほどの量の映像記録を蓄積し、分析することが可能となる状況はメディア史上・報道史上、初のことである。そしてまた、こうした映像の記録が震災・原発事故の記憶として残されていくことになる。

しかしこのように蓄積された番組について実際に「見直す」機会がどれくらいあるだろうか。もちろん震災や原発事故に関するテレビの報道内容に関する検証は、少なからず行われている。特に被災地への津波到達までの報道内容や、福島第一原発の電源喪失や爆発、その後の対応に関する報道について、ソーシャルメディアをはじめとする他のメディアとの比較なども含め、多くの検証が行われている(DAYS JAPAN編集部, 2012 遠藤, 2012 伊藤, 2012 日本災害情報学会デジタル放送研究会, 2013 2014 など)。またこうした報道における対象地域毎の報道量や、発言内容などを分析したものもみられる(田中・原, 2011 2012, 三浦, 2012 目黒・沼田, 2014 など)。しかし震災や原発事故のテレビ報道に関する分析は、震災から3日、あるいは1週間から10日程度を対象としたものが多く、長期的なスパンで分析を行った研究は非常に限られている(松山, 2013 三浦, 2012)。

しかし減少傾向にあるとはいえ、震災と原発に関する報道は今もおお継続している。そして、これからも原発危機と結びついたこの震災の記録と向き合い続けなければならない。それを踏まえ

ば、テレビはこの間、震災や原発事故の何を報じてきたのか、時間の経過のなかで報じられ続けてきたものと報じられなくなったもの、新たに報じられるようになったものについて、検証を行う時期に差し掛かっているのである。

本稿ではこうした現状を踏まえ、震災後の3年半、とりわけ震災後およそ半年が経過した2011年8月1日から2014年8月31日までのおよそ3年間、テレビがどのように「震災」「原発」を記録してきたのか、考えていく。

まず番組に関する「メタデータ」の分析から、この3年間テレビが「震災」や「原発」を伝えるなかで「何を」報じたのか、その内容の変化を分析する。さらに「震災」「原発」で取り上げられた地域とその変化についても分析を行う。

ここまでのマクロなメタデータ分析を踏まえ、地域を限定した上でそこでどのような変化があったのか、分析を行う。そこで津波の犠牲を受けたうえで、原発の影響を今でも受けている「南相馬」を取り上げた番組にクローズアップし、この3年間何がどのように映し出されたのか、メタデータと具体的映像から考えていく。

## 2. 法政大学環境報道アーカイブの取組と「SPIDER PRO」

法政大学環境報道アーカイブでは、震災直後か

ら複数のビデオデッキなどを用いて震災、原発関連番組の収集を行ってきた。さらに2011年の8月からPTP社の提供する「SPIDER PRO」の機器およびデータサービスを用いて震災以降の震災・原発に関する番組を、ニュースやドキュメンタリーを中心に、ドラマやバラエティ番組も含めて幅広く収集、蓄積してきた。2014年12月時点で、収集した番組は外部保存先であるDVDやブルーレイディスクが1000枚以上となっている。さらにSPIDER PROで収集した番組だけでも2TB～3TB容量のハードディスクに4台収められている<sup>3)</sup>。

ここでSPIDER PROでの収集内容について簡単に説明しておこう。法政大学環境報道アーカイブでは、SPIDER PROを用いて関東地区で受信可能な地上波のうち、NHK（総合、Eテレ）、日本テレビ、TBS、フジテレビ、テレビ朝日、テレビ東京の計7チャンネルを24時間、13日程度の期間で同時録画を行っている。撮りためた内容については、PTP社が配信する番組データを用いて検索することが可能である。

法政大学環境報道アーカイブでは「震災」「原発」のほか、「津波」「復興」といった震災関連の語句や、「原子力」「放射」など原発事故に関わる語句、さらに「温暖化」「水俣」「自然エネルギー」などの環境、エネルギー問題にかかわる言葉から番組情報について検索をかけ、その検索結果と内容に合

[放送局名] フジテレビ  
 [番組開始日時] 2014/11/5 11:30  
 [番組終了日時] 2014/11/5 11:55  
 [番組名] FNNスピーク [字]  
 [コーナー開始日時] 2014/11/5 11:43  
 [コーナー長さ(秒)] 76  
 [内容] <ニュース>「津波防災の日」で訓練▼今日11月5日は、東日本大震災を期に国が定めた津波防災の日。各地で津波を想定した訓練が行われた。和歌山県広川町にある広小学校などでおおよそ1000人が参加した。広川町では、南海トラフ巨大地震が起きた場合、最大9mの津波が予想されている。また、静岡県袋井市にある浅羽南幼稚園では、今後も津波への防災意識を高めていくとしている。 関連ワード：【住所・地域】広川町（和歌山）、【住所・地域】袋井市（静岡）、【企業】浅羽南幼稚園、【企業】広川町立広小学校（和歌山県有田郡広川町大字広631）、【時節・暦】津波防災の日、【用語】南海トラフ巨大地震、【用語】東日本大震災、【用語】緊急地震速報 カテゴリ：ニュース  
 [出演者] 【レギュラー出演】 斉藤舞子（フジテレビジョン）

図1 SPIDER PRO メタデータ例

致する番組の収集を行っている。検索は番組の概要からだけでなく、より詳細な番組内のコーナーからも該当する言葉を引き出すことが可能になっている。メタデータにはニュースなどで述べられた内容だけでなく、関連ワードとしてキーワードとなる語句や、映像で映された地域や施設などの情報も入っている(図1)。

今回はこうしたメタデータを利用して分析を行った<sup>4)</sup>。

### 3. メタデータの推移から見る「震災」「原発」の3年

#### 3-1. 「震災」「原発」報道量の推移

まず、「震災」「原発」と検索したメタデータの推移から、テレビが記録したこの3年間の「震災」「原発」の報道量の変化についてみていく。

分析を行った2011年8月1日から2014年8月31日の3年1か月のなかで、「震災」「原発」という言葉が含まれていた番組およびコーナーの

総数は、「震災」番組が5,581番組、「震災」コーナー54,139件、「原発」番組が2,431番組、「原発」コーナーが43,902件となっている。これらの番組やコーナーには重複しているものも多くある。

これを用いて「震災」「原発」に言及したコーナー数の月ごとの推移を図にしたのが図2である。まず「震災」の登場数の推移についてみていくと、毎年3月に山を作りつつなだらかに減少しているのがわかる。2011年9月以降、命日でもある3月に情報が集約化されており、まさに「カレンダージャーナリズム」へと震災報道が転換していることがうかがえる。こうした推移は一見、震災の被害が収束し、復興へと少しずつ進んでいることの現れであるかのようにもみえる。

一方で「原発」の登場数は、「震災」と異なる推移の仕方となっている。必ずしも3月だけに山があるのではなく、それ以外にも大飯原発の再稼働が問題となった2012年7月や、衆院解散総選挙が行われた時期の2012年11、12月、福島第一原発での汚染水漏れ問題が表面化する一方で、

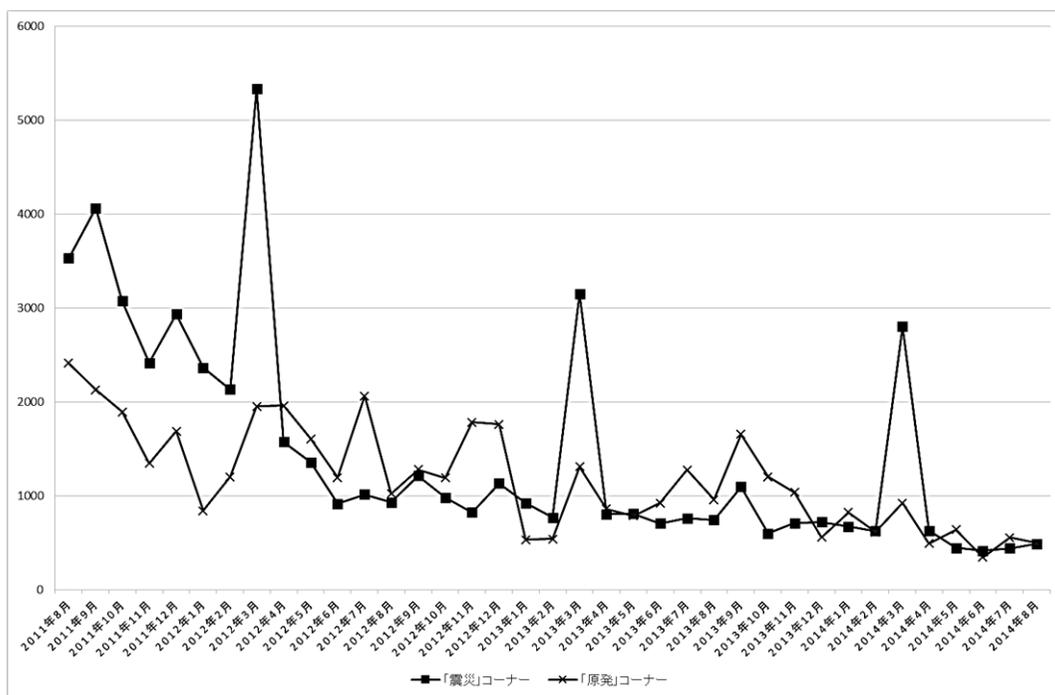


図2 「震災」「原発」に言及したコーナー数の推移

2020年のオリンピックの東京開催が決定するの  
に際し、汚染水の「状況はコントロールされている」という安倍晋三の発言が問題となった2013  
年9月など、原発に関連する問題が浮上するに  
伴って山ができていくことがわかる。

### 3-2. 時間帯別に見た「震災」「原発」報道量の推移

次に時間帯別の報道量の推移をみていく。図3  
と図4は「震災」「原発」の出現コーナー数の月  
別推移を、メタデータの「コーナー開始日時」を  
もとにそれぞれ6時間ごとに4区分し、放送時間  
帯別の推移をみたものである。やや単純化して区  
分における番組の特徴を説明すれば、「朝」（2時  
～8時）は朝の情報番組、「昼」（8時～14時）  
はワイドショー、「夕方」（14時～20時）は夕  
方のワイドニュース、「夜」（20時～26時）は夜  
のニュース番組がそれぞれ放送されている時間  
帯である。それぞれの時間帯別コーナー数の合  
計は、「震災」が「朝」15,389件、「昼」14,322  
件、「夕方」14,895件、「夜」9,532件であり、「  
原発」は「朝」

16,273件、「昼」10,255件、「夕方」9,761  
件、「夜」7,612件となっている。

「震災」と「原発」で共通しているのは、「朝」  
のコーナー数が他の時間帯に比べ多く、「夜」の  
コーナー数が少ない点である。これは「朝」の  
時間帯が3時間程度の長い時間で放送される情  
報番組が多く配置され、しかもその内容も1時  
間を区切りに繰り返し伝達される場合が多いの  
に対し、「夜」の時間帯はニュース番組の多くが  
1時間前後と短く、繰り返しが少ないといった、  
時間帯別の番組編成上の特性が主な要因とし  
て考えられる。

一方「震災」と「原発」で異なる傾向を示し  
ているのは、「昼」と「夕方」のコーナー数の  
推移である。図3の「震災」の時間帯別コー  
ナー数の推移では、「昼」と「夕方」はともに  
「朝」に近いコーナー数の推移となっており、  
総数でも「夜」との差が大きくなっている。た  
だし、「朝」も含め「夜」との差が顕著であつた  
のは2012年5月頃までであり、その後は時間  
帯別のコーナー数の

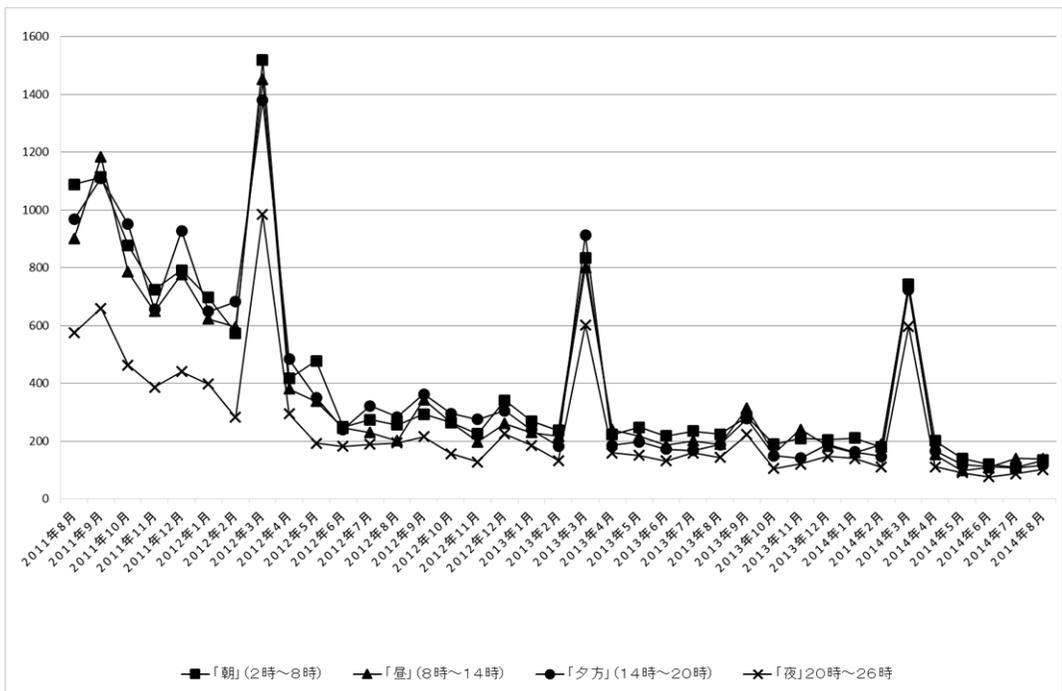


図3 「震災」の時間帯別コーナー数の推移

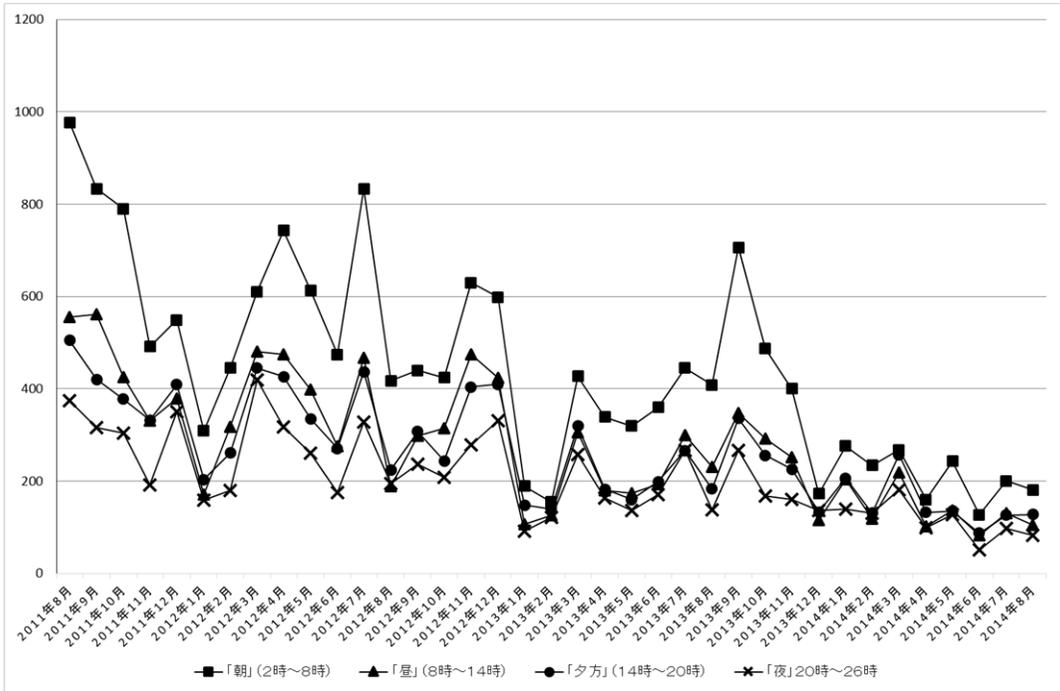


図4 「原発」の時間帯別コーナー数の推移

差は縮まっている。その意味で震災報道の減少が顕著なのは「夜」以外の時間帯ということになるだろう。これに対し図4の「原発」の時間帯別コーナー数の推移では、「昼」と「夕方」はともに「夜」に近いコーナー数の推移となっており、総数でも「朝」との差が大きくなっている。「朝」の時間帯には震災報道と同等かそれ以上の頻度で「原発」の話題が取り上げられている一方で、「昼」と「夕方」の時間帯においては、震災に関する報道に比べ原発事故に関する報道が回避される傾向にあると考えられる。

#### 4. 計量テキスト分析から見える「震災」「原発」の3年

##### 4.1. 頻出語からみた「震災」「原発」報道の特徴

ここからは言語計量ソフトの「KHcoder」(樋口, 2014)を用いた計量テキスト分析から得られた知見についてみていく。「KHcoder」は言葉を形態素まで分解し、その出現回数や特徴が分析可能

なソフトである。ここでは「震災」と「原発」でヒットしたもののうち、前項と同様に番組内コーナーのメタデータから「内容」の部分抜き出し、「ニュース」や「用語」といった項目名などを除いたうえで、「KHcoder」で形態素解析を行った。

表1は「震災」と「原発」でそれぞれ頻出した語句の上位30語である<sup>5)</sup>。表左の「震災」には「宮城」(3位)、「東京」(4位)、「福島」(7位)といった地名のほか、「被災」(5位)、「復興」(6位)、「津波」(10位)、「地震」(11位)、「避難」(17位)、「支援」(19位)など、震災関連のニュースで繰り返し語られた言葉が並ぶ。また「原発」(20位)も比較的上位に入っていて、今回の震災が「原発震災」と呼ばれる状況であることがここからも見えてくる。他に注目したいのが「年」(8位)や「月」(14位)など時間を表示する語句が頻用されていることである。これはもちろん一般的な語句だが、「原発」では必ずしも上位にこの語が入っていない(「年」が36位、「月」が40位)ことから、震災報道でより年月への言及が繰り返されていたことがわか

「震災」		順位	「原発」	
抽出語	出現回数		抽出語	出現回数
東日本大震災	65547	1	原発	74722
震災	43639	2	福島	45580
宮城	29381	3	事故	36719
東京	27997	4	福島第一原発	36179
被災	26874	5	東京電力	26139
復興	24343	6	東京	24439
福島	24340	7	原子力	22640
年	21775	8	民主党	18801
岩手	19586	9	委員	17371
津波	19069	10	字	16877
地震	15874	11	水	16579
行う	15454	12	日本	14378
話す	14430	13	汚染	13641
月	14272	14	双葉	13556
日本	11561	15	首相	12922
人	11445	16	安全	12421
避難	11010	17	大熊	12209
石巻	10266	18	千代田	12142
支援	10097	19	規制	11865
原発	9920	20	大字	11679
被害	9809	21	稼働	11481
語る	9115	22	行う	11146
事故	8077	23	野田	10923
民主党	7972	24	問題	10606
仙台	7846	25	夫沢	10570
街	7666	26	北原	10566
受ける	7511	27	話す	10380
番組	7454	28	避難	10260
前	7428	29	大飯原発	9982
気仙沼	7283	30	安倍	9459

表1 「震災」「原発」の頻出語句30語

る。

一方表右の「原発」では地名のほか、「東京電力」(5位)や「民主党」(8位)などの団体や、「野田」(23位)、「安倍」(30位)など「首相」(15位)の名前、「事故」(3位)、「汚染」(13位)など「福島第一原発」(4位)の事故とその処理問題にまつわる語句に加え、「安全」(16位)、「規制」(19位)、「稼働」(21位)などのように他の原発への規制と再稼働にまつわる語句が頻出している。

#### 4.2. 対応分析で見た「震災」「原発」報道の推移

次に2011年9月から半年ごとに時期区分をもうけ、「震災」「原発」の頻出語について対応分析を行ったものをもとに、それぞれの頻用語句の特徴と推移についてみていく。図5と図6の2次元散布図は、「震災」と「原発」の「内容」から、それぞれ出現数が3000回以上あった頻用語（「震災」124語、「原発」149語）のうち、時期区分

との関連性が強く出ている60語を、時期区分との関係から配置したものである。四角が半年ごとの時期区分（ただし2011年8月のみの区分も含む）を示し、円（バブル）が頻用語を示している。それぞれの大きさは、円はその語句の使用回数に、四角は時期区分内で用いられた文書に含まれたすべての語数に対応している。また原点(0, 0)に近いものほど時期による頻用の差異が少ない語であることを示していて、原点から見て時期区分の近く、あるいは同一方向にある語句は、その時期に比較的多く用いられていることを示している。

まず図5の「震災」の頻用語と時期区分の対応分析をみると、首相の名前や、国会で震災復興予算が審議された秋から冬に登場する「予算」、2012年にその受け入れが問題となった「がれき」を除けば、多くの語句が原点周辺に置かれていることがわかる。これは頻出語句の使用頻度に時期的差異が比較的小さいことを示しているものと思われる。

その時々で「被災」した各地の「避難生活」や「復興」とその「支援」が語られ、時に「阪神淡路」などかつての震災と関連づけられ、時にスポーツ「選手」の活躍や天皇や「皇后」の慰問が震災とのかかわりでクローズアップされていることが読み取れる。

ただし、時間を表す「年」や「月」といった語句は、他の頻用語句より相対的に外部に位置していることもわかる。2011年の時期区分が置かれた中央左寄りに「月」や「今年」が、2012年の3月から8月の時期区分が置かれた中央下寄りに「去年」が、2013年以降の時期区分が置かれた中央右寄りに「年」が位置付けられている。このようにマクロなデータを見る限り、震災に関する報道の内容には、大きな変化が見られず、ただ時間だけが経過しているように思える。

一方図6が示す「原発」の頻用語句は、時期によって変わっていることが見えてくる。原点のやや上方に2011年9月から2012年2月の区分があり、そこから左に向かうと2012年3月から8月が、さらに2012年9月から2013年2月は下

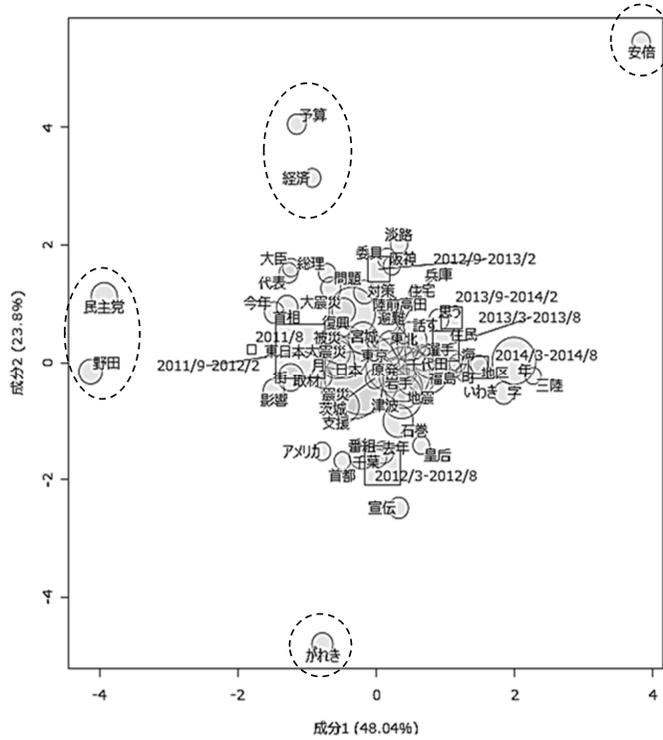


図5 「震災」時期別頻用語句の推移 (対応分析)

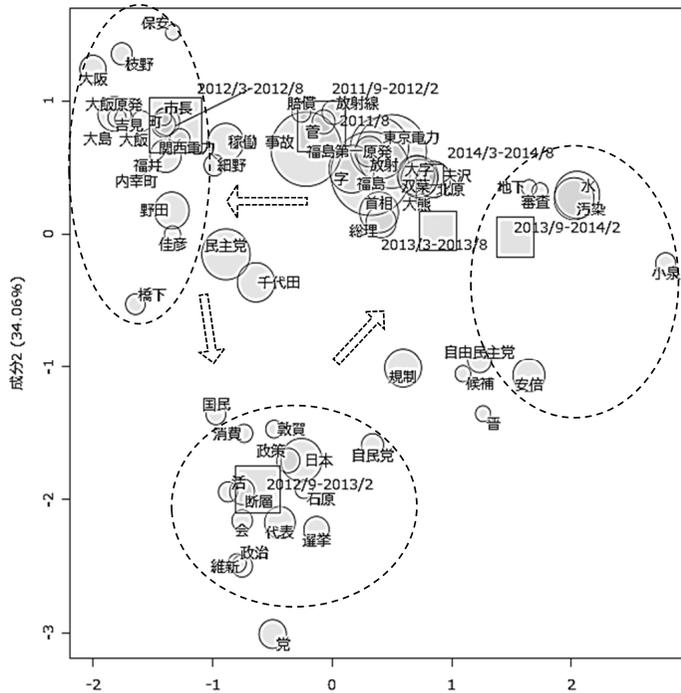


図6 「原発」時期別頻用語句の推移 (対応分析)

方中央に、そして2013年3月以降は原点やや右手へと移っている。

こうした頻用語の移り変わりは、そのまま原発報道のイシューの変化を映し出すものといえる。2011年当初は「福島第一原発」の「放射線」の問題や「東京電力」による「賠償」などが問題の中心であった。また事故対応やその後の原発政策の転換に関する中心人物であった事故当時の「首相」、「菅」直人もこの時期に多く現れている。首相が「野田」「佳彦」へと変わった後、2012年に「関西電力」の「大飯原発」が再「稼働」し、自治体株主である「大阪」「市長」の「橋下」徹がこれに当初反対を訴えていたことも、ここから振り返ることができる。その後「自民党」が「安倍」晋三を総裁として、2012年12月の総「選挙」で圧勝したが、その際にも「原発」問題がテレビの中で大きく取り沙汰されていた。その一方で、「敦賀」原発の2号機直下に「活断層」の存在が原子力「規制」委員会の指摘により浮上し、問題となったのもこの時期である。また2013年9月から2014年2月と言えば、先述の福島第一原発の「地下」から海へと「汚染」「水」が漏れる問題が表面化したなかでの「安倍」首相の発言が繰り返し伝えられた一方で、「小泉」純一郎元首相による反原発の活動が活発化し、2014年2月の東京都知事選で元首相の細川護熙を支援したことが話題となった。

このように頻用語とその推移の対応分析から、2011年9月からの3年間、「震災」に関する報道内容に大きな変化が見られない一方で、「原発」報道はその対象をまぐるしく変えていることが確認された。

## 5. メタデータから見る「震災」「原発」が映した地域

### 5-1. 「震災」「原発」報道に映る都道府県

つぎにこれまでと同様のメタデータのコーナーの内容欄を対象に、今度は分析の対象を地域に絞り、その頻度と変化を見ていく。この3年間でテ

レビがどこを映し出し、どこを映さなくなったのか、メタデータの推移から一定の傾向を見いだすことができるだろう。

まずは都道府県単位で「震災」「原発」それぞれにおける出現回数を見ていこう。表2は「KHcoder」を用いて都道府県名で強制抽出を行い、「震災」「原発」それぞれ都道府県名がデータ上で出現した回数をカウントしたものである。

「震災」「原発」ともに「東京都」が1位、2位と上位となっている。これは政府、官庁、そして東京電力などの関連の深い企業が東京にあること、そしてまた放送局も東京にあり、取材先として都内が選択されやすいことなどが要因として考えられる。

他に「震災」では、中心的被災県である「宮城県」

「震災」		順位	「原発」	
都道府県	出現回数		都道府県	出現回数
東京都	13437	1	福島県	22409
宮城県	13016	2	東京都	16523
福島県	10111	3	福井県	8139
岩手県	8589	4	北海道	3029
兵庫県	2327	5	新潟県	2593
千葉県	2308	6	大阪府	2191
茨城県	2143	7	茨城県	1673
北海道	2075	8	宮城県	1416
神奈川県	1498	9	千葉県	1029
埼玉県	1061	10	佐賀県	881
大阪府	804	11	滋賀県	879
青森県	748	12	鹿児島県	851
新潟県	710	13	福岡県	797
静岡県	683	14	青森県	769
栃木県	597	15	愛媛県	748
愛知県	559	16	埼玉県	747
群馬県	484	17	静岡県	695
京都府	439	18	栃木県	669
福井県	345	19	岩手県	560
長野県	344	20	神奈川県	498
沖縄県	341	21	京都府	494
福岡県	299	22	愛知県	371
高知県	283	23	石川県	337
山形県	261	24	沖縄県	301
三重県	222	25	群馬県	288
広島県	209	26	富山県	268
和歌山県	209	27	山口県	219
山梨県	201	28	長崎県	200
秋田県	170	29	広島県	196
愛媛県	169	30	香川県	180

表2 「震災」「原発」都道府県名の出現数（上位30）

(2位)、「福島県」(3位)、「岩手県」(4位)の東北三県に次いで、「千葉県」(6位)や「茨城県」(7位)など、関東の被災県が連なっていて、東北三県を中心として東日本の太平洋側沿岸に地域が広がっていることがわかる。

被災地域以外で出現回数が多かったのは「兵庫県」(5位)で、1995年の阪神淡路大震災との関連から多く取り上げられている。このほか1993年に奥尻島沖で津波に襲われた「北海道」(8位)や、2007年に中越沖地震のあった「新潟県」(13位)など、かつての地震・津波の被災地が東日本大震災との関連で取り上げられる傾向がみられる。

一方で同じ東北地方でも、被害は少ないものの観光などで損害を受けつつ、避難やガレキの受け入れなど様々な支援を行っている「秋田県」(29位)や「山形県」(24位)が、「福岡県」(22位)や「沖縄県」(23位)といった震災とは関連性の相対的に低い地域に比べても出現順位が低くなっている。これは報道に取り扱われるそもそもの地域的差異・格差といったものが関与している可能性がある。全国放送における報道量の地域偏差との関係性は、こうした災害報道のなかでも考慮する必要があるだろう。

「原発」の順位に目を向けると、原発事故の起きた「福島県」(1位)が圧倒的に多いが、それ以外の地域として「福井県」(3位)、「北海道」(4位)、「新潟県」(5位)、「茨城県」(7位)、「宮城県」(8位)、「佐賀県」(10位)と、原発立地県が上位を占めている。

このほか「大阪府」(6位)は先述の通り関西電力の本店設置地域であり、大飯原発の再稼働問題などにより多く登場している。また原発立地県ではない「千葉県」(9位)も上位に位置しており、2011年10月に柏市で放射線量の高い「ホットスポット」が確認されたことに関連する話題などが報じられていた。

「震災」「原発」とともに留意する必要があるのは、逆説的ではあるが、47都道府県で一度も「震災」あるいは「原発」関連の報道で映し出されなかった地域は一つもないということである。例え

ば「震災」で最も出現回数の少なかった「島根県」でも、2011年8月23日放送のNHK『ニュースウオッチ9』で「東日本大震災で被災した宮城県女川町の小中学生たちが、島根県隠岐の島町に招かれ、地元の郷土芸能を学んだ」というニュースが伝えられている。「原発」で最も少なかった「徳島県」も、2013年7月7日放送のフジテレビ『ザ・ノンフィクション・かえる物語～帰村宣言騒動記～』のなかで、原発事故により非難をしている福島県川内村の村民を徳島県で受け入れるよう訴える元川内村村議の姿が映されていた。これらはテレビが「震災」や「原発」事故をネーションワイドな事象として構成し、日本全土に関わるものとして意味づけを行っていることの証左であろう。

## 5.2. 「震災」「原発」報道に映る「被災地」とその推移

つぎに3年間でテレビが映した地域の推移について、より詳細に見ていこう。図7と図8は全国の市町村に東京23区を加えた市町村区のうち、「震災」と「原発」の「内容」から、「震災」は出現数が200回以上あった80市町村区のうち、時期区分との関連性が強く出ている60市町村区を、「原発」は出現数が100回以上あった83市町村区のうち、時期区分との関連性が強く出ている60市町村区を、時期区分との関係から配置したものである<sup>6)</sup>。

「震災」は原点(0,0)から見て右側が2011年から2012年の時期区分が、左側が2013年から2014年の時期区分が配置されているのがわかる。被災を受けた地域のなかで顕著に取り上げられなくなったのは長野県の「栄村」である。栄村は東日本大震災の翌日、2011年3月12日に震度6強の揺れがあり、地域全域で大きな被害を受けた。「栄村」はトータルの出現順位では46位となっているが、2013年9月から2014年2月には0回となるなど、2013年以降の出現回数に顕著な減少が見られる。

一方で2013年以降に比較的取り上げられる機会の増えた地域もある。2013年にNHK朝の連

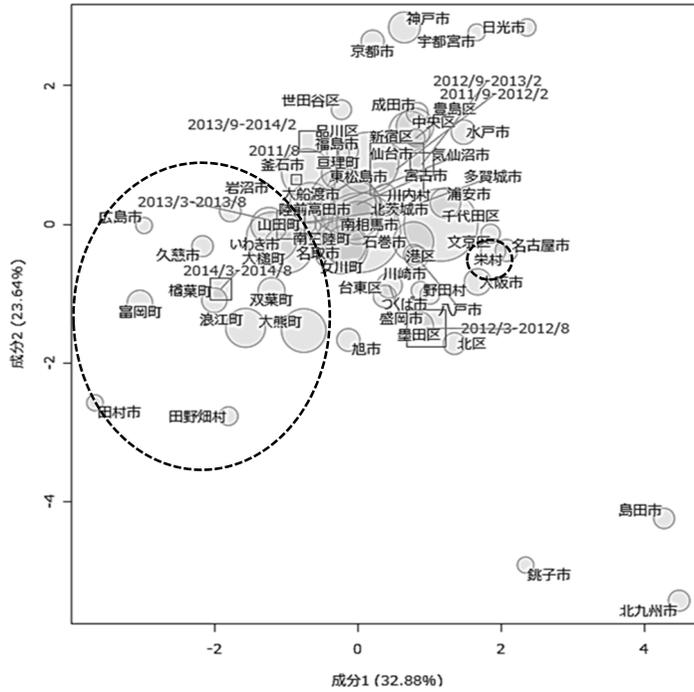


図7 「震災」時期別登場市町村区の推移 (対応分析)

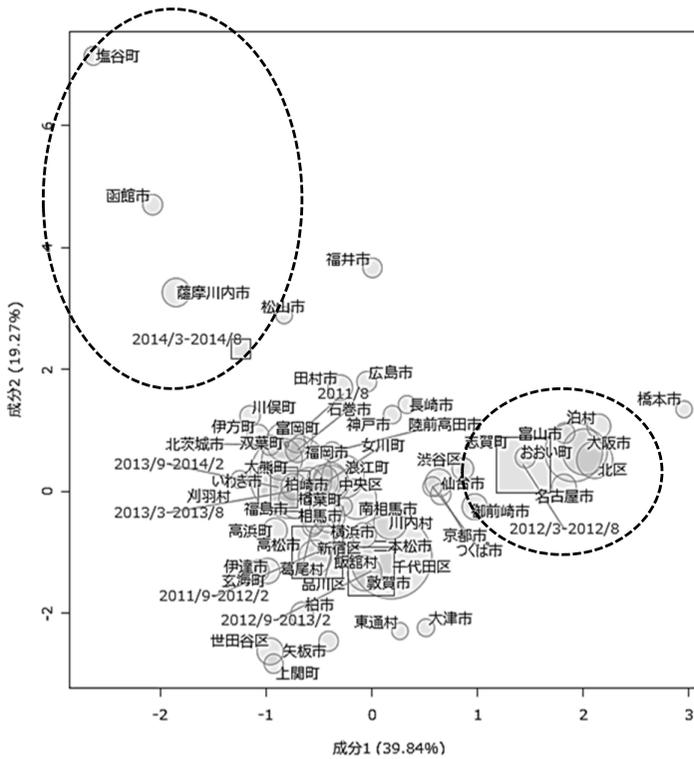


図8 「原発」時期別登場市町村区の推移 (対応分析)

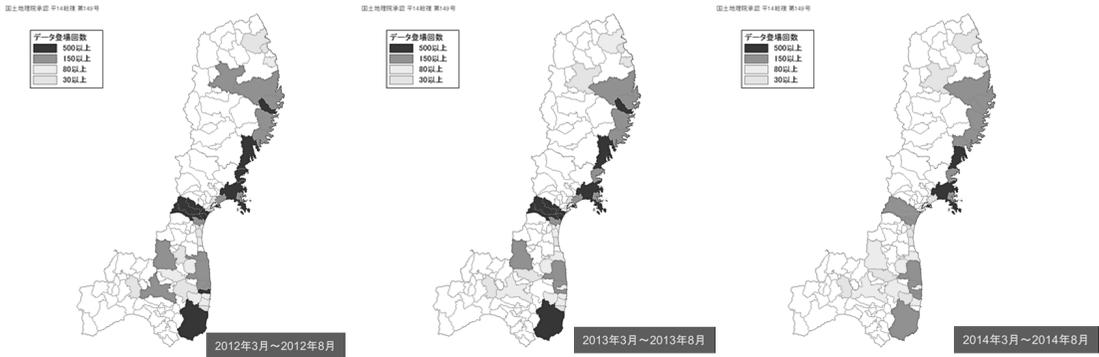


図9 「震災」東北三州市町村の登場頻度推移の地図  
(3年間で200回以上データに登場した40市町村のみ)

続テレビ小説『あまちゃん』の舞台となった岩手県「久慈市」や、その『あまちゃん』でも取り上げられ、2014年に全線開通で注目された三陸鉄道沿線の岩手県「田野畑村」などがその一例であり、「千年希望の丘」が注目された宮城県「岩沼市」なども含め、2013年以降で増加傾向を示すのは復興の象徴的空間であることがわかる。

これ以外に「田村市」「双葉町」「大熊町」「浪江町」「楢葉町」など複数の福島県の地域が図の左側に位置していることもわかる。これは2013年以降、原発周辺地域で避難指示の解除やその準備段階に入る地域が徐々に増えていくなか、以前に比べ報道しやすくなったことで、こうした地域に住む人々の様子を描く機会が増えていることを表すものと思われる。

ただしこうした形で取り上げられる機会が増える地域は必ずしも多くはない。図9の地図は2012年2月から8月、2013年2月から8月、2014年2月から8月という3つの期間において「震災」で登場した東北三州市町村名の登場頻度を示したものである。その傾向は松山秀明(2013, 84)による2011年3月から1年間の調査でのものと酷似しており、震災直後を除いたおよそ3年間に於いても「報道の地域偏在」に大きな変化が見られないことを示している。「石巻市」や「気仙沼市」、「陸前高田市」といった「報道過密地域」は依然として多くの機会に映し出されているが、震災報道それ自体の量が減っていくなか、「取材

過疎地域」の登場回数はさらに減少しているのである。

図8の「原発」の映し出す地域の変化を見ると、多くの地域と時期区分が原点の付近に配置されている一方で、2012年3月から8月と、2014年3月から8月については取り上げられた地域に特徴があることがわかる。2012年3月から8月は先述の大飯原発の再稼働関連で「おおい町」(福井県)、「大阪市」(大阪府)のほか、志賀原発1号機下への活断層の疑いから「志賀町」(石川県)と北陸電力本店のある「富山市」(富山県)、2012年5月に停止した泊原発のある「泊村」(北海道)、あるいは中部電力本店のある「名古屋市」(愛知県)など、福島以外の原発の停止や再稼働、それに関連する夏期の電力問題を巡って全国的にエネルギーに関する問題が顕在化したことがわかる。一方2014年3月から8月は、川内原発のある「薩摩川内市」(鹿児島県)のように、再稼働を巡る手続きのなかで浮上した地域がある一方で、青森県で建設中の大間原発の建設差し止めを訴えた「函館市」(北海道)や、原発事故の指定廃棄物の最終処分場候補として浮上し、町として反対の姿勢を見せている「塩谷町」(栃木県)のように、原発の立地自治体の周辺地域や、放射性廃棄物の処理場所などで、これまで周辺化されていた地域が原発問題のなかで新たに登場するようになっている。

これに対して福島県内の自治体はどうだろう

国土地理院承認 平14総報 第149号

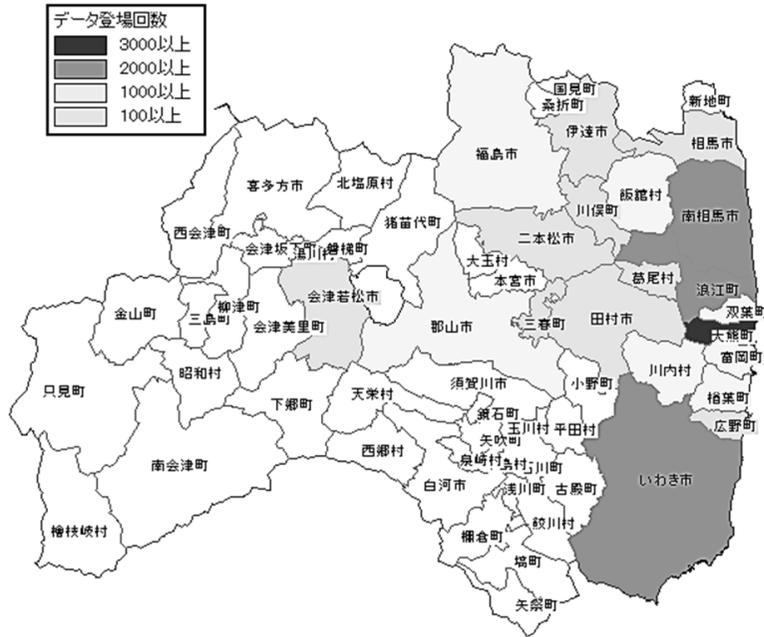


図10 「原発」福島県内市町村の登場頻度の地図  
(3年間で100回以上データに登場した40市町村)

か。図10の地図は3年間の福島県内の市町村名の「原発」報道でのメタデータ登場頻度を示すものだが、福島第一原発のある「大熊町」の登場回数が圧倒的である。それ以外の頻度は大熊町から放射状に広がっているのではなく、「南相馬市」や「いわき市」が取材地の中心になっており、原発から20キロ圏内の地域は必ずしも多くない。むしろ放射能汚染地域の「浪江町」や「飯館村」が相対的に多く登場している。時期による変化については、ほぼ「震災」と同様大きな変化はみられず、当初は風評被害や避難区域からの避難者との関連で映し出されていた「猪苗代町」や「白河市」が映し出される機会は非常に少なくなっているなど、内陸部を中心に登場数は減少の一途をたどっている。このように「原発」をめぐる場所は、全国でみれば原発立地自治体を中心に時期によって変化している一方で、福島に限れば同じ場所が取材され続けているといえる。

## 6. 「震災」「原発」のなかの「南相馬」

### 6-1. メタデータから見る「南相馬」の3年

これまでメタデータから「震災」「原発」報道の全体的な傾向を見てきた。それではこれを一つの地域に絞って見た場合、どのようなことが見えてくるのだろうか。ここでは一つの地域に焦点を絞り、そこでの3年間、テレビは何を映し出したのか、その特徴を考えていく。

本節では福島県の南相馬市を対象として、同一の地域が「震災」「原発」という異なる報道のなかでどのように言語化されたのか、メタデータをもとにその特徴をみていく。南相馬市は636人と、福島県で最も多い津波による死者を出すなど、地震と津波による被害を大きく被った。しかもその多くが福島第一原発から30キロ圏内に位置していることから、原発事故当初は「屋内避難指示区域」として物資がほとんど入ってこないなどの困難に見舞われた。当初マスメディアも取材に入っ

てこなかったため、市長自らがYouTubeなどを介して窮状を訴えたこともよく知られている。その後も放射能の汚染状況によって「計画的避難区域」、「避難指示解除準備区域」、「住居制限区域」、「帰還困難区域」などとして、複数の「区域」に分けられ、避難生活を強いられる人々が現在も存在している。本稿で用いているメタデータにおける「南相馬市」の市町村区別出現頻度は「原発」で7位、「震災」でも12位と、非常に多く登場し、しかも時期による偏りが少なく、コンスタントにその名が登場している。同一の地域が「震災」「原発」という異なる報道のなかでどのように言語化されたのかを見るにあたり、南相馬は有意義な場と言えるだろう。

SPIDER PROのメタデータで「南相馬」に言及した番組内のコーナーは、「震災」では953件、「原発」では960件あった。このうち380件前後で重複するコーナーが存在した。これをそれぞれ「KHcoder」にかけ、対応分析をおこなった。図11と図12の2次元散布図は、これらのメタデータの「内容」のなかに、「震災」では出現数が120回以上あった頻用語73語のうち、時期区分との関連性が強く出ている60語を、「原発」では出現数が135回以上あった頻用語74語のうち、時期区分との関連性が強く出ている60語を、時期区分との関係から配置したものである。これをみると4節で取り上げた全体を対象とした図5と図6とは、出現する語句も、時期区分との配置も様相が異なっていることがわかる。

図11では原点からみて右側に2011年9月から2012年8月までの1年間が配置され、ほぼ中央に2012年9月から2013年2月を置きつつ、左寄りに2013年3月から2014年8月までの3つの時期区分が近い位置に配置されている。そして頻用語句も図5に比べ全体的に拡散し、時期により語られる内容に変化が見られる。2011年から2012年の南相馬における「震災」報道は、津波で大きな被害があったにもかかわらず、浮上する語の多くが原発問題に関わっていることがわかる。2011年10月に緊急時「避難」準備「区

域」の「解除」が行われたが、放射能の「影響」を排除すべく「除染」などが問題となっている。2013年以降も含め、「震災」報道のなかでは「家族」「子ども」「小学校」など放射能の影響などからどのように「生活」すべきか「考える」南相馬でのありようが見えてくる。一方で「野馬追」や「音楽」など、地域でのイベントや復興を願う、支援する活動も2013年以降、多くなっていることもわかる。

図12の「原発」報道における「南相馬」の推移をみると、図6の「原発」報道全体としては明確にあった時期による変化があまりみられず、放射能による「子ども」への影響や「除染」などが常に問題になっていることがわかる。それでも「汚染水」問題の浮上した2013年秋や、「セシウム」が稲から検出された理由が「福島第一原発」の解体作業であるとわかった2014年など、原発の処理にかかわる問題にことあるごとに翻弄される様子も見えてくる。

このように「南相馬」という一つの空間に目を向けると、全体的なメタデータの分析では見えてこなかった、「震災」報道における変化と、「原発」報道のなかの変わらない地域の実態、そしてそこに生きる人々のありようが多少具体的な形で見えてくることになる。

## 6.2. 「野馬追」の映像から見える「南相馬」の3年

ここまで「南相馬」について、この3年間、テレビがどのように描いていたのかをメタデータから読み解いてきた。しかし三浦伸也(2012)も指摘している通り、こうしたメタデータを用いた分析は、テレビが映し出したマクロな様相は見られるが、実際には頻出する語句を用いて何を描いてきたのか、その詳細な部分が見えてこない。テレビが「震災」や「原発」の何を描いたのかを問うのであれば、当然実際の映像の視聴・分析を通して、そこで映し出されたものについて考えるべきである。メタデータを介したマクロな分析と、そこから見いだされる構図をもとに、実際の映像を見返すミクロな分析の往還こそ、その全体像に

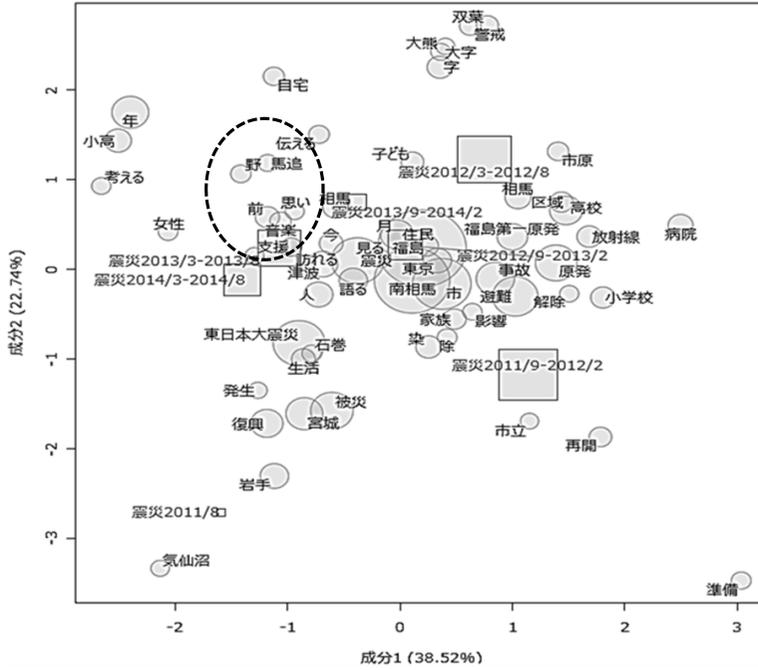


図 11 「南相馬」の「震災」時期別頻用語句の推移 (対応分析)

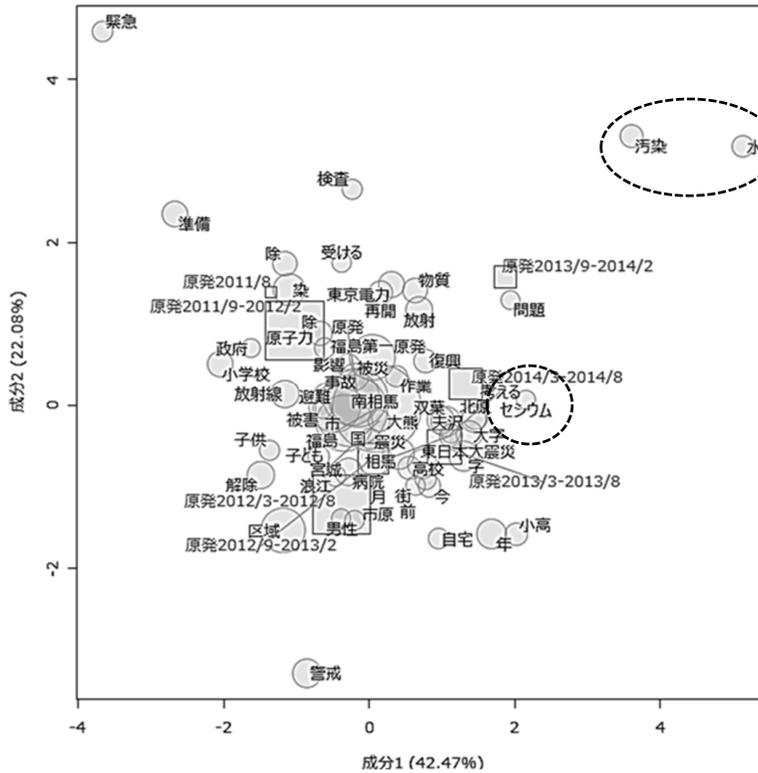


図 12 「南相馬」の「原発」時期別頻用語句の推移 (対応分析)

迫ることを可能にするのである。

本稿ではメタデータによるマクロな全体像から見えることを仮説的に提示することに重心があるため、本格的な映像の分析は別の機会に譲ることとしたいが、その一端として、ここでは「南相馬」の「震災」のメタデータで登場した「野馬追」にまつわる報道から、実際の映像の視聴を通してわかることを提示していきたい。

相馬野馬追とは福島県の相馬地方、福島県沿岸部の原発周辺地域以北で1000年以上も続く伝統行事であり、その会場の多くは南相馬市にある。戦時下においても中断されることのなかったこの祭りは、2011年、震災と原発事故により開催を危ぶまれた。しかし「鎮魂と復興への祈りを込め」て、規模を縮小しつつも開催した。翌2012年には、野馬追の行事の一つの「野馬懸」会場となる相馬小高神社の、修復や除染作業を行うなどして、例年並みの規模で開催した（南相馬市復興企画部危機管理課、2013）。

「震災」のメタデータで「南相馬」「野馬追」で該当したのはのべ42件あった。ここでは2011年8月11日に放送された『カンブリア宮殿 特別版「祭りで“地域”を取り戻せ!』』（テレビ東京）と、2013年9月7日放送の『目撃!日本列島「明日に向かって駆ける～父と娘の“相馬野馬追”～』』（NHK）を中心に見ながら、震災後の変化をテレビはどのように映し出したのか、考察を行なう。

2011年8月11日の『カンブリア宮殿』は相馬野馬追を含め、開催が危ぶまれた東北地方での夏祭りの模様を描いている。そのなかで震災の津波で家と家族を亡くした、50代後半の郵便局員の男性がクローズアップされている。男性は津波で家族を亡くしたことに「なんで俺だけ生きてるんだろうって」と語る。その後、男性が流された自宅の跡に赴く姿が映し出される。そこには建物が全て流され、平坦な空間が荒涼と広がる津波の被害地域と、無機質に積み上げられたガレキの山が登場する。こうした映像は、震災から数か月経過後の被災地の描き方として、しばしば目にして

いたものであった。そこで男性はひっくり返った自動車を次々と指差し、それらが死亡した家族が乗っていた車であり、車の中で家族を発見した様子を矢継ぎ早に語りだし、沈黙する。そして「自分の身内の痕跡がここにあるんですよ」と語り、大破した自動車の前で手を合わせ、佇む。このような失われた家族について語り、悼むためのグリーンワークも、やはり2011年から2012年にかけて、震災を描くテレビのなかで繰り返し描かれていたものではなかっただろうか。この男性はこの番組以外にも他局も含めて複数回取材されているが、その際にも同様にグリーンワークが描かれ、男性が体を震わせて失った家族について語る描写がみられた。

番組はこの後流された自宅近くの海で「家族の協力があったから（野馬追が）できた」「（野馬追に）出ることが家族への供養だと思っている」と語る男性を映している。そして男性はガレキのなかから出てきた家族の写真を身に付け、野馬追に参加する。甲冑を身にまとい、馬で闊歩する町には、稲作ができない田園と、至る所に打ち上げられた船が映る。そこに「変わり果てた街を、千年変わらぬ武者たちが進む」とナレーションと勇壮な音楽が流れる。まさに野馬追による「鎮魂と復興への祈り」という言説がこうした言葉や映像、音楽により構成されていたのである。

次にその2年後、2013年9月7日放送の『目撃!日本列島』を見ていこう。このドキュメンタリーでは、津波で妻を失った父と娘が野馬追に出場するまでのおよそ半年間が描かれている。番組の冒頭、クレーンの操縦士である父親が、沿岸部の復旧工事を行う様子が映し出される。また番組の中盤では、野馬追の練習のために来た海岸を映している。どちらの映像にも2年前の『カンブリア宮殿』に映し出されていた高く積まれたガレキは見られない。また当日の野馬追の武者行列にも、2年前にあった震災の爪痕は最早残されていない。これらの映像から、南相馬においても復旧・復興が着実に進んでいることが垣間見ることができ。ただし、父が娘を連れてかつての自宅にあ

る妻の墓へと連れていく場面では、ガレキが撤去され、草木は生えているものの、いまだに建物はほとんどなく平坦で荒涼とした空間が映し出される。そして妻の墓へと向かう父親から「ものは治ってもな、心の穴は埋めらんねえよ、何年たっても」と、津波に流されいまだ行方不明である妻への喪失感が、震災から2年を経ても残り続けていることが口にされる。このような、ガレキは撤去されても何も新たに作り出されることのない荒涼たる被災地と、今なお残る失った家族への喪失感といった描写もまた、震災後数年を経た被災地の描かれ方の一例と言えるだろう。

野馬追を描く際、宮城や岩手の被災地の描写と何が違うかといえば、やはり原発事故による放射能の問題である。『目撃！日本列島』のなかでも、娘に小中学生を対象にした放射線の検査結果が届いた様子が映され、父親は南相馬を出ることも考えたと言っている。この親子は2013年3月放送の『小さな旅』（NHK）にも登場しており、その際に震災後、娘が半年間南相馬から避難していたことが語られていた。野馬追を描く番組では、しばしば親子が登場し、親から子、子から孫へと、伝統行事が代々受け継がれていく家族の絆を描くことが多い。困難に負けずに祭りが引き継がれていく伝統的コミュニティそれ自体が、復興への象徴的存在になっているといえる。しかし、野馬追では原発事故による放射能の影響により、離れて暮らす家族の様子もしばしば描かれている。また

この番組の親子のように、再び一緒に暮らすことができても、放射能への不安に晒されながら生活を送ることになることも、汚染された地域で暮らす人々の描かれ方として、一つの定型となっている。放射能への不安はこれからも浮上すると思われる。南相馬を映す際にも原発や放射能にまつわる問題は今後も色濃く影を落とし続けることになるだろう。

このように南相馬の野馬追という一つのトピックから映像を見てみると、「震災からの復興」を描きつつ、それが必ずしも順調には進んでいない現状、そして原発周辺地域の「放射能による復興の妨げ」という「震災」「原発」報道における実際の一端が見えてくる。こうした特徴が時間とともにどのようになるのか、他の地域も含めてテレビが映す経過を今後も追っていく必要があるだろう。

## 7. 分析から見えた「震災」「原発」の3年

ここまで主に3年間の「震災」「原発」関連番組のメタデータを使用して、テレビが映した「震災」「原発」の3年間について考えてきた。ここから見えてくるのは「震災」「原発」報道の明らかな質の違いである。これをまとめると表3のようになる。表は次の5つの観点からまとめている。1点目が「原発」「震災」の話題としての自立性の問題であり、2点目が「時間」の経過とトピック

「震災」	「原発」
○「原発震災」としての位置付け	○「震災」からの乖離
○時間の経過と「3月」への強い意味づけ	○日々変化する「問題」と「原発」（「福島第一」「放射線」「汚染水」「大飯」「再稼働」・・・）
○変わらない報道内容（「復興」は半ばであり状況はあまり変わらない）	○「選挙」への争点化（衆院選、参院選、都知事選・・・）
○慰問と復興の象徴としてのセレブリティ	○登場し続ける政治家
○「忘却」の進行	○「変わらない」汚染地域と「終わらない」原発問題

表3 テレビに映る「震災」「原発」の違い

クの変化、3点目が内容の変化と焦点、4点目が頻繁に登場する有名人、5点目が今後の問題ということになるだろう。

今後はここから見えたことを一つの仮説としてとらえ、より詳細な分析を行う必要があるだろう。繰り返しになるがメタデータでわかるのはその報道内容の概要であり、テキストマイニングはそのメタデータから特徴を理解するための「採掘（マイニング）」の作業なのである。深層を知るには個別のメタデータの確認とさらなる番組分析が必要になる。

また言うまでもなく、こうした作業を継続するためには、アーカイブが継続的、安定的に運用されていることが必要であり、こうしたメタデータやそこから導き出された結果の共有は様々な場でなされるべきであろう。

#### 注

- 1) 例えば朝日新聞の記事検索で「風化」という言葉がある記事数を調べると、2011年は416件（うち「震災」も含むのは159件）であったが、2012年には690件（同312件）、2013年は775件（375件）、2014年は12月21日までで804件（375件）となっている。
- 2) 例えばNHK放送文化研究所や日本大学法学部新聞研究所など。ただし、こうした番組は権利処理の関係上、視聴の範囲は限定的なものとなっている（林, 2013）。
- 3) なお、これらの番組・メタデータの収集作業は、法政大学サステナビリティ研究教育機構環境アーカイブズ（現法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズ及び法政大学サステナビリティ研究所）の協力のもとで行われた。
- 4) このような受信可能な全番組を同時録画する形で番組を保存し、そのメタデータを取得することが可能なものはほかにもある。JCC社による「ドキュメントアナライザー」などのサービスがその一例であり、本サービスを用いた震災報道に関する分析も既に行われている（目黒・沼田, 2014）が、SPIDER PROのメタデータの特徴は発言内容などが略され、概要的なものとなっている一方で、映像に映る場所に関する詳細や、キーワードが機械的ではなく、人が見て入力されているこ

とにある。

- 5) この頻出語句の検証については、いくつか留意する点がある。ここでいう「出現回数」とはメタデータ内での言葉として何回出現したかという意味であり、放送の中で述べられた、あるいは映し出された回数でもない。またSPIDERのメタデータには「関連ワード」という形で地域（その住所）や施設、用語、あるいは人名などがピックアップされている。今回の分析ではこうした語も含めて分析しているため、内容との重複によりこうした語が上位となりやすくなっている。
- 6) ただし「中央区」や「北区」、「港区」など他の道府県の特別区と同名のものが重複して扱われているため、必ずしも東京都の特別区のそれを指していない場合もある。例えば図8右下で「大阪市」と「北区」が近い位置にあるのは、この「北区」が多くの場合で大阪市北区を意味しているからである。

#### 文献

- DAYS JAPAN 編集部, 2012, 『検証 原発事故報道—あの時伝えられたこと (DAYS JAPAN4月号増刊号)』デイズジャパン。
- 遠藤薫, 2012, 『メディアは大震災・原発事故をどう語ったか—報道・ネット・ドキュメンタリーを検証する』東京電機大学出版局。
- 原由美子・山田健太・野口武悟編, 2014, 『3.11の記録—東日本大震災資料総覧 テレビ特集番組篇』日外アソシエーツ。
- 林香里, 2013, 『震災後のメディア研究, ジャーナリズム研究—問われる「臨床の知」の倫理と実践のあり方 (〈特集〉震災後のメディア研究, ジャーナリズム研究)』『マス・コミュニケーション研究』82:3-17。
- 樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版。
- 伊藤守, 2012, 『ドキュメントテレビは原発事故をどう伝えたのか』平凡社。
- 松山秀明, 2013, 『テレビが描いた震災地図—震災報道の「過密」と「過疎」』丹羽美之・藤田真文編『メディアが震えた—テレビ・ラジオと東日本大震災』東京大学出版会, 73-117。
- 目黒公郎・沼田宗純, 2014, 『「現象先取り・減災行動誘導型報道」を実現する方法』『放送メディア研究』11:69-110。
- 南相馬市復興企画部危機管理課, 2013, 『震災の記録—南相馬市』『南相馬市ホームページ』(2014年10月20日取得, <http://www.city>.)

- minamisoma.lg.jp/index.cfm/10,15930,c,  
html/15930/16.pdf).
- 三浦伸也, 2012, 「311 情報学の試み—ニュース報道  
のデータ分析から」高野明彦・吉見俊哉・三浦伸  
也『311 情報学—メディアは何をどう伝えたか』  
岩波書店, 33-118.
- 日本災害情報学会デジタル放送研究会, 2013, 「検証  
～東日本大震災～命を支える情報はどうなって  
いたのか」日本災害情報学会ホームページ (2014  
年 9 月 3 日 取 得, [http://www.jasdis.gr.jp/\\_  
userdata/06chousa/dttv/dttv5\\_report.pdf](http://www.jasdis.gr.jp/_userdata/06chousa/dttv/dttv5_report.pdf)).
- 日本災害情報学会デジタル放送研究会, 2014, 「～  
東北地方太平洋沖地震～命を救う情報はどう  
なっていたのか」日本災害情報学会ホームペー  
ジ (2014 年 9 月 3 日 取 得, [http://www.jasdis.  
gr.jp/\\_userdata/06chousa/dttv/hbf-report\\_  
dttv4.pdf](http://www.jasdis.gr.jp/_userdata/06chousa/dttv/hbf-report_dttv4.pdf)).
- 田中孝宜・原由美子, 2011, 「東日本大震災 発生か  
ら 24 時間 テレビが伝えた情報の推移」『放送  
研究と調査』61(12): 2-11.
- 田中孝宜・原由美子, 2012, 「東日本大震災 発生  
から 72 時間 テレビが伝えた情報の推移～在京  
3 局の報道内容分析から～」『放送研究と調査』  
62(3): 2-21.

西田 善行 (ニシダ・ヨシユキ)  
法政大学大原社会問題研究所